

平成二十六年 入学試験問題

国語 (文系)

一五〇点満点

※配点は、学生募集要項に記載のとおり。※

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに14ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページある(うち10ページは下書き用)。
- 三、問題は全部で3題ある(1ページから14ページ)。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文は、著者が一九四一年に満州（現在の中国東北部）へ派遣され、四五年の日本の降伏後にソビエト連邦軍に抑留されてのち、四九年に重労働の判決を受けた前後を回想したものである。これを読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

起訴と判決をはさむほふた月を、私は独房へ放置された。とだえては昂たかぶる思郷の想いが、すがりつくような望郷の願いに変わったのはこの期間である。朝夕の食事によつてかろうじて区切られた一日のくり返しのなかで、私の追憶は一挙に遡さかのぼ行した。望郷の、その初めの段階に私はあった。この時期には、故国から私が「恋われている」という感覚がたえまなく私にあった。事実そのようにして、私たちは多くの人に別れを告げて来たのである。そのとき以来、別離の姿勢のまま、その人たちは私たちのなかにあざやかに立ちつづけた。化石した姿のまま。

弦つるにかえる矢があつてはならぬ。おそらく私たちはそのようにして断ち切れ、放たれたはずであった。私をそのときまでささえて来た、遠心と求心とのこのバランスをうたがいはじめたとき、いわば錯誤さくごとしての望郷が、私にはじまったといつていい。弦こそ矢筈やはずへかえるべきだという想いが、聞きわけのない怒りのように私にあった。

この錯誤には、いわば故国とのあいだの（取り引き）がつねにともなつた。私は自分の罪状がとるにたらぬものであることをしいて前提し、やがては無力で平穏な一市民として生活することを、くりかえし心に誓つた。事実私が一般捕虜とともにそれまですごして来た三年の歳月は（それは私にとって、事実上の未決期間であつた）、市井の片隅でひっそりといとなまれる、名もない（テ）ほんような生活がいかにかけがえないものであるかを、私に思いしらせた。しかもこの（取り引き）の相手は、当面の身柄の管理者であるソビエト国家ではなく、あくまで日本——おそらくそれは、すでに存在しない、きのうまでの日本であつたのであろうが——でなければならなかつたのである。

私たちは故国と、どのようにしても結ばれていなくてはならなかつた。しかもそれは、私たちの側からの希求であるとともに、（向う側）からの希求でなければならないと、かたく私は考えた。望郷が招く錯誤のみなものは、そこにあつた。そして私

が、そのように考ええた時期は、海は二つの陸地のあいだで、ただ焦燥をたえたままの^(イ)かとの空間として私にあった。その空間をこえて「手繰られ」つつある自分を、なんとしてでも信じなければならなかったのである。

告訴された以上、判決が行なわれるはずであった。だが、いつそれが行なわれるかについては、一切知らされなかった。独房で判決を待つあいだの不安といらだちから、かろうじて私を救ったものは^(ウ)状態に近い空腹であった。私の空想は、ただ食事によつて区切られていた。食事を終った瞬間に、一切の関心はすでにつきの食事へ移っていた。そしてこの、(つぎの食事への期待があるかぎり、私たちは現実に絶望することもできないのである。私はよく、食事の直前に釈放するといわれたら、なんの未練もなく独房をとび出すだろうか、大まじめで考えたことがある。

なん日かに一度、あたりがにわかになさわがしくなる。監視兵がいそがしく廊下を走りまわり、つぎつぎに独房のドアが開かれ、だれかの名前が呼ばれる。足おとは私のドアをそのまま通りすぎる。「このつぎだ。」私は寝台にねころがる。連れ去られた足音は、二度と同じ部屋に還つてはこない。そして、ふたたび終りのない倦怠と不安のなかで、きのうと寸分たがわぬ一日が始まる。どこかの独房で手拍子をうつ音が聞こえる。三・三・七拍子。日本人だという合図であり、それ以上の意味はない。

望郷とは⁽¹⁾いに植物の感情であろう。地におろされたのち、みずからの自由において、一步を移ることをゆるされぬもの。海をわたることのない想念。私が陸へ近づきえぬとき、陸が、私に近づかなければならないはずであった。それが、棄民されたものへの責任である。このとき以来、私にとって、外部とはすべて移動するものであり、私はただ私へ固定されるだけのものとなった。

四月二十九日午後、私は独房から呼び出された。それぞれドアの前に立ったのは、いずれもおなじトラックで送られ、おなじ日に起訴された顔ぶれであった。員数に達したとき、私たちは手をうしろに組まされ、私語を禁じられた。

私たちが誘導されたのは、窓ぎわに机がひとつ、その前に三列に椅子をならべただけの、およそ法廷のユーモアにふさわしい一室であった。椅子にすわり、それが生涯の姿勢であるごとく、私たちは待った。ドアが開き、裁判長が入廷した。若い朝

鮮人の通訳が一人(彼もまた起訴直前にあった)。私たちは起立した。

初老の、実直そうなその保安大佐は、席に着くやすでに判決文を読みはじめていた。私が立った位置は最前列の中央、判決文は私の鼻先にあった。ながながと読みあげられる、すでにおなじみの罪状に、私の関心はなかった。全身を耳にして私が待ったのは、刑期である。早口に読み進む判決文がようやく終りに近づき、「罪状明白」という言葉に、重労働そして二十五年という言葉がつづいたとき、私は耳をうたがった。ロシア語を知らぬ背後の同僚が、私の背をつついた。「何年か」という意味である。私は首を振った。聞きちがいの思ったからである。

それから奇妙なことが起った。読み終った判決文を、おしつけるように通訳にわたした大佐は、椅子の上に置いてあった網のようなものをわしづかみにすると、あたふたとドアを押しあけて出て行つた。大佐がそのときつかんだものを、私は最初から知っていた。買物袋である。おそらくその時刻に、必需品の配給が行なわれていたのであろう。この実直そうな大佐にとつて、私たち十数人に言いわたした二十五年という刑期よりも、その日の配給におくられることの方がはるかに痛切であつた。ソビエト国家の官僚機構の圧倒的な部分は、自己の言動の意味をほとんど理解する力のない、このような実直で、善良な人びとでさええられているのである。

つづいて日本語で判決が読みあげられたとき、私たちのあいだに起つた混乱(エ)ときようこう状態は、予想もしない異様なものであつた。判決を終つて^{*}溜りへ移されたとき、期せずして私たちのあいだから、悲鳴とも怒号ともつかぬ喚声⁽²⁾がわきあがつた。私は頭から汗でびっしりになつていた。監視兵が走り寄る音が聞こえ、怒気を含んだ顔がのぞいたが、「二十五年だ」というと、だまつてドアを閉めた。

故国へ手繰られつつあると信じた一条のものが、この瞬間にはつきり断ちきられたと私は感じた。それは、あきらかに肉体的な感覚であつた。このときから私は、およそいかなる精神的危機も、まず肉体的な苦痛によつて始まることを信ずるようになった。「それは実感だ」というとき、そのもつとも重要な部分は、この肉体的な感覚に根ざしている。「手繰られている」こと

を、なんとしてでも信じようとしたとき、その一条のものは観念であった。断ち切られた瞬間にそれは、ありありと感覚できる物質に変貌し、たちまち消えた。⁽³⁾ 観念が喪失するときに限って起るこの感覚への、変貌を、そのちもう一度私は経験した。観念や思想が〈肉体〉を獲得するのは、ただそれが喪失するときでしかないことの意味を、いまも私はたずねずにいる。意味が与えられるとき、その実感がうしなわれることを、いまもおそれるからである。あつというまに遠のいて行くものを、私は手招いて追う思いであった。

四月三十日朝、私たちはカラガンダ郊外の第二刑務所に徒歩で送られた。刑務所は、私たちがいた捕虜収容所と十三分所のほぼ中間の位置にあった。ふた月まえ、私が目撃したとおなじ状態で、ひとりずつ衛兵所を通って構外へ出た。白く凍っていたはずの草原は、^{ステップ}かがやくばかりの緑に変っていた。五月をあすに待ちかねた乾いた風が、吹きつつかつ匂った。そのときまで私は、ただ比喩としてしか、風を知らなかった。だがこのとき、風は^(オ)かんぺきに私を比喩とした。このとき風は実体であり、私はただ、風がなにごとかを語るための手段にすぎなかったのである。

(石原吉郎「望郷と海」より)

注(*)

矢筈Ⅱ矢の端の、弓の弦を受ける部分。

〈溜り〉Ⅱ捕虜を収容している空間のことをさす。

カラガンダⅡ中央アジア北部、カザフスタンの地名。当時はソビエト連邦に属していた。

問一 傍線部(ア)ゝ(オ)のひらがなを漢字に改めよ。

問二 傍線部(1)はどのような意味か、説明せよ。

問三 傍線部(2)で、監視兵はなぜそのような態度をとったのか、説明せよ。

問四 傍線部(3)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問五 二重傍線部はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

次の文は、西郷隆盛を論じたものである。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

西郷はいまや日本に樹立されようとしている近代に対して、本質的に古い世代のひとりであった。いふなればその最後のひとりであった。西郷には「文明とは道の普く行はるるを賛称せる言にして、宮室の荘嚴、衣服の美麗、外観の浮華を言ふには非ず」という有名な言葉がある。これは彼の西欧批判でもあり明治政府の文明開化主義への批判でもある。だがそういう言葉より、私をほんとうにおどろかすのは次のような言葉である。「己れを愛するは善からぬことの第一也。決して己れを愛せぬもの也」。* こういうマクシムは今日のわれわれにとってたんに実行がむずかしいというばかりのものではない。これはわれわれにとつて、それを本気に実行しようと思ひ立つ心のバネがまったく失われてしまつてゐるようなマクシムなのである。われわれはこういうマクシムを自分に課す本気のでどころを見失つてしまつてゐる。だが、それはわれわれにとつても美しい、もしそれを実現することができたなら何もにもかえがたい至福であるようなマクシムである。西郷は本気でこのマクシムに近づこうとした人であつたらしい。そしてわが身をその戒律と至近の距離におくことができた人であつたらしい。

もちろんこういう格率はわが国の士族の伝統的教養である儒学の道德観に由来するものといえるだろう。西郷が佐藤一斎の『言志四録』の信奉者だつたことは周知のとおりである。だがこの言葉の深部にはそういう儒学的リゴリズムとは異質な、たゆたうようなゆたかな生命のリズムが感じられる。私はこういうマクシムの背景には、人と人とのあいだのコミュニケーション的交わりに対する肉感的な幻覚が存在するものと信じる。もし西郷が南島に流刑されて島人と交わることがなかつたら、西郷にはこの言葉はなかつたと信じる。このような人と人との交わりにおいてなりたつコミュニケーション的な感覚は、わが国の生活民たちがその悠久の歴史を通じて保持して来た伝統的感性の核心であつた。そしてまたそれは、大久保、木戸、伊藤、山県らの維新革命の勝利者がおそらく生涯ただの一度も感じとつたことのない感覚であつた。

己を愛さずともすむ心、それは己を羞じるぶこつな魂であるにちがいない。内村鑑三はその感動的な西郷論のなかに次のような挿話を録している。「実に彼は他人の平和を擾すことを非常に嫌つた。他人の家を訪ねても、進んで案内を乞はず、玄関

に立つたまま折よく誰かが出てみつけてくれるまで、そこに待つてゐることがよくあつた程である」。彼の数ある逸話のなかで、私はこの挿話にだけほんとうにおどろく。しかし(2)こういう人格は、古い日本人にとつてはある意味ではなじみ深いものであつた。私がおどろくのは私が現代の日本人だからである。古い日本人にとつてこのような人格はしたわしくはあつても、ことさらおどろくべきものではなかつた。なぜならそれは伝統的な範型(3)のひとつであつて、そのような人格の形象はこの国の歴史において、少数ではあつてもしばしば現れることがあつたからである。

明治の初期、わが国の重大な社会現象としてうかびあがつた世代的分裂について、中江兆民は『三酔人経綸問答』で興味ある指摘を行つてゐる。彼は同時代の日本人をすべて恋旧家と好新家とに分類することができるとし、その基準を年齢と出身藩においた。「好新元素に富むの徒は、理論を貴び、腕力を賤み、産業を先にし、武備を後にし、道德法律の説を鑽研し、経済の理を窮究し、平居文人学士を自ら任じて、武夫豪傑の流、叱咤慷慨の態は、其痛く擯斥する所なり。若夫れ恋旧元素に富むの徒は然らず。彼れ其れ自由を認めて豪縦不羈の行と為し、平等を認めて鑢刈破滅の業と為し、悲壯慷慨して自ら喜び、法律学の佶屈なる、経済学の縝密なるが如きは、其深く喜ばざる所なり」というのが、その世代の特質の要約である。私がこの世代論において注目するのは、恋旧家の肖像が次のように描かれてゐることである。

(あ)「恋旧元素は……平生無事の日(4)に在ては、高拱緘黙して自ら喜び、一切緻密なる思考を須ひ円滑なる実行を要する事項は、瑣碎なりとして、之が措置を施すことを、屑とせずして、曰く、我れ素より迂拙にして、此事に当るに足らず。誰某、慧巧にして幹鍊なり。能く勉励して事に従ふ。彼れ自ら当に之を弁ず可きのみ、と。蓋し平生大関係無き事条に於ては、専ら愚を以て自ら智とし、拙を以て自ら巧とし、其或は知る所を枉げて知らずとし、其或は能くする所を故らに能くせずとして、他人に推諉して肯て与らず。其意に以為へらく、是れ小事のみ、何ぞ心を用ふるに足らん、と。一旦利害の関する所有るに及では、頭を昂げて一言し、衆議洵々たるも略ぼ恤ふること無く、可と無く否と無く、必ず其言ふ所を行ふことを以て目的と為して、中道にして遽に他人の議に従ふが如きは、其極て恥辱とする所なり」。

おそらく板垣をモデルにしたのであろうが、この性格は活写されている。私はこういう性格の人物を知っているし、こういう性格がかならず実務社会の不適應者ないしそれへの反抗者であることも知っている。西郷は広い意味でこのような性格の人格であった。『遺訓』の一節で彼は小人の害について言及し、「能く小人の情を察し、其長所を取り之を小職に用ひ、其材芸を尽さしむる也」と小人を使う要領を教えている。「小人」とはまさしく好新元素に富む新世代の実務家であり、西郷の態度は兆民描くところの恋旧家の態度と符合する。このような心性を一語で要約するのは困難であるが、反功利主義という規定はそれほど的是なものであるまい。西郷は「道に志す者は偉業を貴ばぬもの也」という一句を『遺訓』のなかに残しているが、むしろこれは反功利的信条の告白である。

「草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷也。今と成りては、戊辰の義戦も偏へに私を嘗みたる姿に成り行き、天下に対し戦死者に対して面目無きぞ、有名な話だが、西郷はこういつてしばしば涙を流すことがあったそうである。清廉であつても無能な為政者より、たとえ個人的には悪徳が認められても有能な為政者のほうが、結果として国民に福利をもたらすものだ、というのはわれわれの近代人的常識の一部である。西郷にはこういう結果優先、業績至上の考えかたがどうしても理解できなかっただろう。ドストエフスキイ流に言えば、そのよ⁽⁴⁾うな考えかたには「何かいまわしいもの、世道人心をまつぶたつにたち割るようなもの」があるからである。明治十年戦争はあ^{*}るレベルでいえば、実務官僚と現実的な権力執行者に対する夢想家の反功利主義的反乱であつた。

(渡辺京二「逆説としての明治十年戦争」より)

注(*)

マクシムⅡ行為の個人的規準。

格率Ⅱマクシムに同じ。

佐藤一斎Ⅱ江戸後期の儒者。

リゴリズム Ⅱ 厳肅主義、嚴格主義。

コミュニオン Ⅱ 共同体。

範型 Ⅱ 類型、タイプ。

平居 Ⅱ 平生。

擯斥 Ⅱ しりぞけること。

豪縦不羈 Ⅱ 勝手気ままで横暴なこと。

鏗刈破滅 Ⅱ 大なたをふるつてなぎ倒すこと。

佞屈 Ⅱ 文字・文章がかたくなるしくて難解なこと。

縝密 Ⅱ 綿密。

高拱緘黙 Ⅱ 泰然と手をこまねき口をつぐんでいること。

幹錬 Ⅱ 物事に熟練していること。

大関係無き事条 Ⅱ たいして重大でない事柄。

推諉 Ⅱ 自分は遠慮し、他人に付託すること。

利害の関する所有る Ⅱ 重大な結果をひき起こす。

洵々 Ⅱ 騒ぎどよめくさま。

中道 Ⅱ 中途。

板垣 Ⅱ 板垣退助。

戊辰の義戦 Ⅱ 戊辰戦争。一八六八年から翌年まで行われた新政府軍と旧幕府側との戦いの総称。

明治十年戦争 Ⅱ 西南戦争。一八七七年の西郷隆盛らの反乱。

問一 傍線部(1)の意味するところをわかりやすく述べよ。

問二 傍線部(2)について説明せよ。

問三 傍線部(3)について、「恋旧家」が事柄に対処する時の態度を、引用文(あ)の内容に基づいて簡潔に述べよ。

問四 傍線部(4)はどのようなことを言っているのか、説明せよ。

問五 波線部について、その理由を本文の内容に基づいて説明せよ。

三

次の文は、『とはすがたり』の一節である。作者の二条は、幼時より後深草院の御所に仕え、成人して院の寵愛を受けるようになった。ところがある日、親族より、「自分の部屋をすっかり片付けて、御所から退出せよ」という手紙が届く。わけがわからない二条は、院に手紙を見せて尋ねるが、院は何も答えなかった。以下は、それに続く場面である。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

さればとて、出でじと言ふべきにあらねば、出でなむとするしたためをするに、四つといひける長月のころより参り初めて、⁽¹⁾時々の里居のほどだに心もとなくおぼえつる御所の内、今日や限りと思へば、よろづの草木も目とどまらぬもなく、涙にくれてはべるに、をりふし恨みの人参る音して、^{*}「下のほどか」と言はるるもあはれに悲しければ、ちとさし出でたるに、泣き濡らしたる袖の色もよそにしろかりけるにや、「いかなることぞ」など尋ねらるるも、「問ふにつらさ」とかやおぼえて、⁽²⁾物も言はれねば、今朝の文取り出でて、「これが心細くて」とばかりにて、こなたへ入れて泣き居たるに、「されば、何としたることぞ」と、誰も心得ず。

おとなしき女房たちなどもとぶらひ仰せらるれども、知りたりけることがなきままには、ただ泣くよりほかのことなくて、暮れゆけば、⁽³⁾御所さまの御気色なればこそかかるらめに、またさし出でむも恐れある心地すれども、⁽⁴⁾今より後はいかにしてかと思へば、今は限りの御面影も今一度見まゐらせむと思ふばかりに、迷ひ出でて御前に参りたれば、御前には公卿二三人ばかりして、何となき御物語のほどなり。

^{*}練薄物の生絹の衣に、^{*}薄に葛を青き糸にて縫ひ物にしたるに、赤色の唐衣を着たりしに、きと御覧じおこせて、「今宵はいかに、御出でか」と仰せ言あり。何と申すべき言の葉なくてさぶらふに、^{*}「くる山人の便りには訪れむとにや。青葛こそうれしくもなけれ」とばかり御口ずさみつつ、女院の御方へなりぬるにや、立たせおはしましぬるは、⁽⁵⁾いかでか御恨めしくも思ひまゐらせむ。

(『とはすがたり』より)

注(*)

恨みの人||西園寺実兼さねかねのこと。もともと二条と親しい仲だが、このころ行き違いがあつて、二条を恨んでいた。

下のほどか||自分の部屋に下がつておられますか。

問ふにつらさ||「忘れてもあるべきものをなかなか問ふにつらさを思ひ出でつる」(『続古今和歌集』)、「吹く風も問ふにつらさのまさるかななくさめかぬる秋の山里」(同)などの和歌に由来し、慣用句のように用いられた表現。

練薄物の生絹の衣||絹糸で織つた薄い衣。

葛||蔓つるを伸ばして生長する植物。

くる||「来る」と、「葛」の縁語である「繰る」との掛詞。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)における二条の心情を説明せよ。

問三 傍線部(3)と(5)を、それぞれ文意が明らかになるように、ことばを補つて現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。